

令和8年産小麦の作況と麦類の当面の技術対策

米麦畜産課
(農産振興室)

生育の概況	成熟期は平年より早まる見込み。赤かび病の発生は少ないが、5月以降の高温により枯れ熟れの発生が懸念される。現在の作柄は「並」が見込まれる。
作業の進捗状況	排水対策、収穫準備、適期収穫

1 気象経過 (前橋地方気象台データの平年比、※5月は20日まで、参考資料参照)

項目	11月	12月	1月	2月	3月	4月	※5月
平均気温	+0.4℃	+0.8℃	+0.2℃	+2.4℃	+1.9℃	+2.3℃	+1.1℃
降水量	17%	38%	-%	51%	118%	110%	100%
日照時間	111%	108%	113%	101%	105%	89%	132%

2 生育概況

(1) 概要

播種は概ね順調であったが、遅れたほ場では乾燥の影響で出芽や初期生育が遅れた。11月中旬以降は少雨で生育が停滞したものの、2月下旬以降の降雨と高温により急速に回復し、4月も高温が続いたため、出穂期は各麦類とも平年より5日程度早まった。成熟期は二条大麦、六条大麦で平年より3日程度早く地域によっては収穫が始まっている。小麦では5日程度早い見込み。

生育量は地域差があるものの、穂数、穂長、穂重は平年並からやや下回る傾向が見られる。

(2) 病虫害・障害等の発生状況

赤かび病の発生は少なく、うどんこ病が一部で見られる。雑草は、播種後の降水量が少なく土壌が乾燥していたため発生が遅れていたが、3月以降に発生が進んだ。コアカザやヤエムグラが広域で確認され、一部ではイタリアンライグラスの増加も見られた。一部で倒伏や凍霜害が見られたが影響は限定的である。一方で高温による枯れ熟れ症状の発生が確認されており、影響が懸念される。

(3) 作況ほ等の調査結果

作況ほ(さとのそら)のデータの平均は、播種期は11月21日(過去平均比+2日)、出穂期は4月11日(同-5日)、稈長は78cm(同98%)、穂長は8.7cm(同100%)、穂数は688本/m²(同94%)となっている。

農業技術センターの生育基本調査結果(小麦「さとのそら」、11月14日播種)では、節間伸長始期は3月15日(過去10ヶ年平均比-4日)、出穂期は4月13日(同-6日)であった。稈長は73cm(同-6.6cm)、穂長は9.0cm(同±0.0cm)、穂数は454本/m²(同90%)であった。成熟期は5月30日程度と予測されている。

(4) 作柄のまとめ

小麦の県内平均作柄は「並」が見込まれる。

表1 小麦作況ほ調査結果（さとのそら）

地区	播種期 月日	出穂期 月日	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/m ²	穂重 g/m ²
平均	11/21(+2)	4/11(-5)	78 (98)	8.7(100)	688 (94)	495 (86)
前橋市	11/22(+2)	4/11(-6)	82 (100)	9.0(98)	890 (122)	572 (83)
伊勢崎市	11/24(+1)	4/10(-6)	66 (88)	7.9(97)	634 (103)	447 (92)
高崎市	11/21(+3)	4/12(-3)	71 (97)	8.3(102)	507 (80)	394 (84)
太田市	11/25(-)	4/15(-)	85 (-)	8.8 (-)	694 (-)	588 (-)
千代田町	11/20(±0)	4/13(-7)	91 (106)	9.5(102)	719 (76)	565 (87)

※各地区の()内は過去の平均値に対する日数および比率(%)。

日数の「-」は早い、「+」は遅いことを示す。

過去の平均値は、前橋市は過去2年、伊勢崎市は同4年、高崎市は同6年、太田市はほ場変更により過去値なし、千代田町は同4年の値。太田市は県平均から除外した。

表2 農畜産課・地域農業課内の麦類の作柄概況

地区	県平均	中部	伊勢崎	西部	東部	館林
作柄概況	並	並	並	並	並	並

3 技術対策

(1) 収穫準備・適正収穫

- ア 収穫までの降雨に備え、排水不良のほ場では、排水溝の確認や手直しを行う。
- イ 収穫物に雑草種子や異種穀粒などが混入しないよう対策（抜き取り等）を行う。
- ウ 機械類の清掃を徹底し、収穫物への異物混入を防止する。
- エ 荷受け施設においては、麦の生育状況に合わせた稼働計画を設定する。
- オ 著しい生育むらによる未熟粒の多発・倒伏・穂発芽・赤かび病・なまぐさ黒穂病の有無を確認し、これらの発生が認められた場合は別収穫とし、乾燥調製施設への搬入は行わない。
- カ 収穫適期の目安は、穀粒水分が25%以下になった時を基準とする。穂首の曲がり状態で判断すると、二条大麦が90%以上、小麦・六条大麦が50%以上の時である。ただし、遅発穂が見られる場合は収穫を数日遅らせる。
- キ 早刈りを避けて適切な穀粒水分で収穫することで、乾燥に要する経費削減につながる。
- ク 二条大麦は穀皮が薄く損傷粒が発生しやすいので、コンバインのこぎ胴回転数の設定に留意する。
- ケ 成熟期後に長雨が予想される場合、穂発芽を避けるため収穫可能な状態となったら、できる限り速やかに収穫作業を行う。

(2) 乾燥・調製

- ア 収穫した穀類をそのまま長期間放置すると発熱により品質が低下するため、収穫作業は乾燥能力に見合った量とし、計画的に実施する。やむをえず高水分麦を収穫した場合は、速やかに乾燥を行う。
- イ 乾燥調製施設では、穂発芽・赤かび病・なまぐさ黒穂病等の被害粒やカラスノエンドウ等の雑草種子が混入しないよう荷受時の確認を徹底する。
- ウ 枯れ熟れ等の影響により細粒・未熟粒・硬質粒の発生が懸念されることから調製時は流量等に留意するとともに、必要に応じて色彩選別機等を活用して丁寧に調製する。フルイ目はビール大麦が2.5mm、六条大麦（食用）と小麦が2.0mmを基準とし、必要に応じてフルイ目の調整を行う。整粒歩合は小麦80%以上、ビール大麦90%以上、乾燥仕上がり水分は小麦が12.5%以下、ビール大麦・六条大麦が13%以下とする。

(3) 災害対策等

降ひょうにより麦が脱粒したり、その他の災害等によりやむを得ずすき込む場合など、麦子実がほ場に投入される場合は後作の施肥量の調整を行う。後作が水稲の場合は、脱粒子実が300kg/10a程度では基肥窒素を1～2割減肥し、

400kg/10a 以上では 2kg/10 a 程度にとどめる。さらに、土壌の強還元化を防止するため、間断かん水や中干し等の水管理を十分に行う。

(4) 麦わら処理

麦わらは有効な資源である。焼却は避け、すき込むなど適正に処理する。

【参考資料】

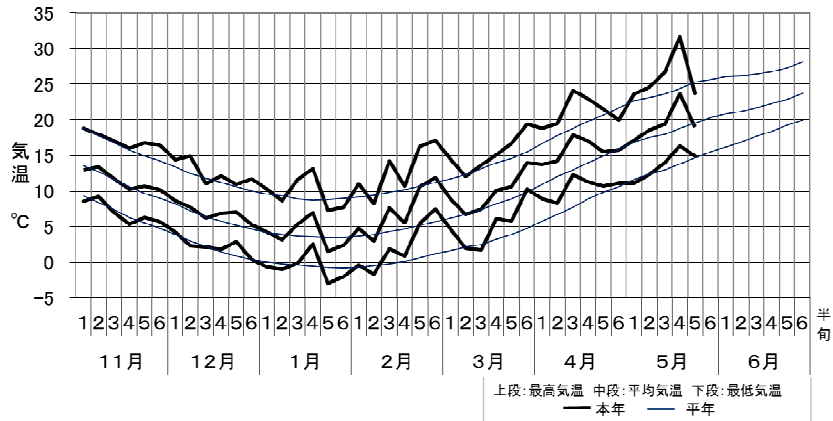


図1 麦作期間の気温（前橋地方气象台）

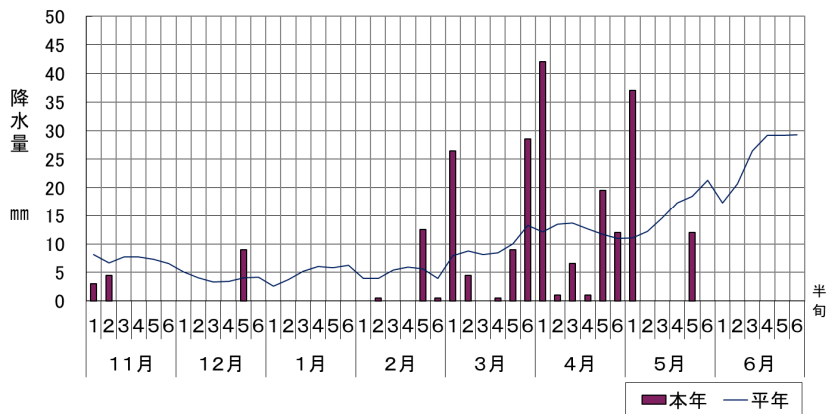


図2 麦作期間の降水量（前橋地方气象台）

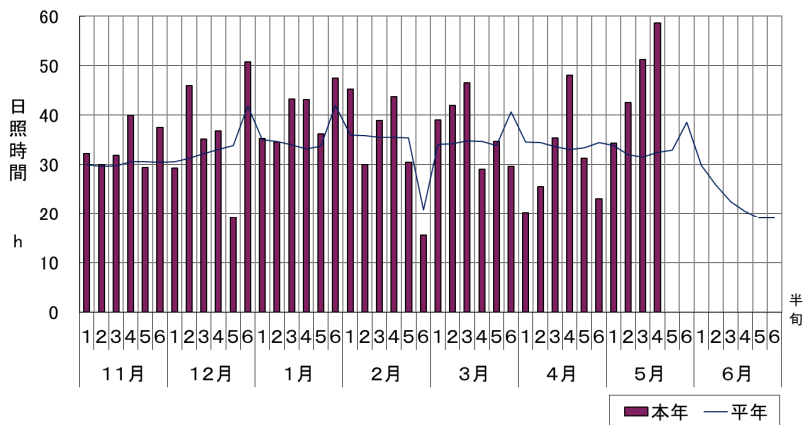


図3 麦作期間の日照時間（前橋地方气象台）